

(5) 農業技術変化と農家婦人労働

— 岩手県志和、複合経営農家の事例 —

清泉女子大学 松 田 苑 子

(一) 稲作技術変化への対応としての複合経営

志和農協が、複合経営を推進しはじめたのは、昭和三十九年である。この時期は、中型トラクターが普及しはじめ、稲作作業の大型機械化への動きが顕著になった時期である。以後、収穫、乾燥、調整における大型機械化がすすみ、動力田植機が普及するにいたった。このような大型機械化は、生産性を向上させると同時に、農家の労働組織内に、あらたに余剰労働力を生み出す。志和農協が推進してきた複合経営は、稲作と併せて、畜産と各種の園芸作目を導入することにより、この余剰労働力を農業内部に再吸収しようという、積極的対応であったと、私たちは考える。表は、昭和五十五年に筆者等が行った志和地区全戸を対象にした無作為抽出によるサンプル調整より得た。こんにちの志和地区の複合経営は耕作規模によって、「複合」のパターンが異なる。小規模農家は水稲のみ、という作目構成が多い。大規模農家は園芸作目を栽培する比率が低く、水稲+畜産というパターンである。稲作+園芸作目+畜産とい

耕作規模・作目構成別農家数

	栽培作目		水稲のみ		準複合		複合		超複合		その他		計
	畜産	産	無畜	有畜	無畜	有畜	無畜	有畜	無畜	有畜	無畜	有畜	
0.5 ha 未満	16	5	1	2	7	4	1	2	1	2	0	5	43
0.5 ha~1.5 ha	29	10	4	7	3	10	1	0	1	0	0	3	67
1.5 ha~2.5 ha	4	8	4	13	3	21	1	5	1	5	0	3	62
2.5 ha~3.5 ha	1	8	0	7	1	16	0	1	0	1	0	2	36
3.5 ha 以上	1	6	0	4	0	5	0	0	0	0	0	1	17
計	51	37	9	33	14	56	3	8	3	8	0	14	225

う複合経営の典型を示すのは、中規模農家であるといえる。

(二) 就業構造

農家が直系家族の構成を示すものと仮定すると、稲作作業の中心的な担い手は親の世代の夫婦である。子の世代の夫婦は、夫も妻も、園芸作目、畜産を、主に担当している。また、若夫婦は、農外就労をしている比率が、非常に高い。

若夫婦のなかには、農作業に殆んどたずさわらない、という例も出てきている。恒常的勤務をしていたり、若い嫁で、家事と育児にだけ専念するなど、である。労働組織のなかで、作目にかんする世代別任務分担がみられると同時に、農作業と農外就労にかんしても、世代別任務分担がみられるのである。

(三) 農家労働組織の変容

「学校を出てから農作業を手伝ったことはなかったし、結婚しても子供が生まれるまでつとめていたから、農業知識は不足だ。」(31歳)

「子供ができるのが遅かったし、ずっと勤めていた。子供が小さいうちは手がかかってあまり手伝えなかったので、本格的に農作業を手伝うのは、この一、二年のことで、はせかけも、どういうふうにかけてよいかわからなかった。」(31歳)

農作業に従事しない若妻や、園芸作目に専念している若い世代の成員には、稲作作業にかんする知識と技術の不足を認める例がみられる。彼らは、これまで、殆んど、稲作にたずさわってこなかったのである。機械化によって生じた、農家労働組織内の世代別任務分担は、固定されようとしていると解することができる。

複合経営といっても、基幹は稲作である。若年層が稲作作業から分離する、というかたちでの、世代別任務分担の固定化は、稲作作業の世代交替を、遅らせる、ないしは、むずかしくすると考えられる。

その結果、従来の稲作経営、労働組織としての農家の変容がもたらされるのではないだろうか。